

翻訳者の類型と翻訳作業の諸相

影浦峽（東京大学大学院教育学研究科）

阿辺川武（東京大学大学院教育学研究科）

1 はじめに

「翻訳とはいかなる行為か」。本質を問う多くの問いと同様に、この問いは曖昧である。

第一に、この問いは、例えば翻訳を翻訳者の認知的過程と見なした上で、それをモデル化することで答えが与えられるようなものと解することができる。自然言語処理の中では、主にこの点が、翻訳プロセスを認知的過程と見なす前提のもとで問われてきた¹。

第二に、この問いは、第一の問いが自明なものとしている前提を改めて検討に付すものとして理解することもできる。翻訳とはそもそも何か。いったいいかなる条件のもとで、私たちは、他の何ものでもないまさに翻訳という行為を捉えることができるのか？

本稿の目的は、第二の問いを念頭に置きつつ、第一の問い—ある程度具体的に翻訳過程を論ずることを可能にするレベル—を問うにあたって考えるべき要因を検討し、翻訳者の類型・翻訳作業の諸相を図式的に整理することにある²。

2 翻訳とはどのような行為か？

2.1 翻訳は言語を創造する

「パラドックスめいているかもしれないけれど、西欧語本来の言い回しと表現、つまりその発想法を、なるべく『直訳的』に私の古風な日本語の訳文に『移植』しよう」と試みながら、新しい日本語、あるいはいっそう豊かな日本語の創造をひそかに考えていたと言っても、大げさなようだが、まるっきりの嘘にはならないはずである³。カルヴィーノやパヴェーゼの翻訳で知られる米川良夫はこう書いている³。

同様に魯迅は、「翻訳にかんする通信」の中で、次のように言う。「翻訳には——原書の内容を中国の読者に紹介する以外に——さらに重要な役割があります。それはすなわち、わたしたちが中国の新しい現代語を創り出すのに役立つということです」。

¹X文Y訳でも理解でもない「翻訳」としての翻訳が認知的プロセスではなくむしろ社会的プロセスであり、言語ではなくテキストに、それも言語的産物としてのテキストではなく社会的産物としてのテキストにより強く関わることについては、影浦(2006)「人間の翻訳におけるコーパスの位置づけ」言語処理学会第12回年次大会、p. 452-455. が論じている。

²翻訳をめぐる議論は技術的なものから哲学的なもの、経験談から理論的なものまで多岐にわたり、その数も多い。本稿では、スペースの都合上、引用は選択的に行う。

³米川良夫(2000)『「文は人なり」とは言うものの、……』岩波書店編集部編『翻訳家の仕事』東京：岩波新書、p. 146-147.

ソシュールも述べるように、単一言語性の創造は書かれた言葉の存在に大きく支えられている⁴。さらにそうした単一言語性の具体的な創造において翻訳が特権的役割を果たしたことはつとに知られている⁵。翻訳は、その社会的位置づけの根源においては、言語を創造するプロセスそのものである。むろん現在行われている膨大な量の日常的な翻訳についてその本質を言語の創造であると言うことはできないが、それにもかかわらず通常の翻訳にもこの側面の面影は残っている：「それで一言語全体の音色が少し変わる」⁶。

2.2 翻訳は原テキストの目指す理想を目指す

野谷文昭(マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』の翻訳でその名を知っている者も多いだろう)は、外国文学翻訳者の体験談に次のような共通点を指摘する。「テキストに耳を澄ませると自分にしか聞こえない声が聞こえてくるのでそれを日本語で表現したいという欲求に駆られること、テキストを読み込むときは読者だが訳文を作る段になると限り無く創作者に近づく気がする」⁷。

鈴木道彦は、ブルーストやファノン、ニザンの訳者らしく、さらに次のように言う。「……翻訳が可能になるためには、……原作もまた絶対究極のものではない、と考える必要がある。もし指一本ふれることもできないほど完璧な作品なら、それを解体してまるで異質な言語に組み替えることなど、恐れ多くてできるものではない。その意味で、すべての翻訳可能な言語は、マラルメの言うように不完全なものだろう。いわば翻訳者は、愛情をこめてどこまでも原作に近づこうとしながら、必ず原作を相対化するのである。なぜなら原作者も作品を構築しながら、決して完全な最終点に到達することはないからだ。一方、翻訳者は原作を手がかりにしながら、作者自身も到達できなかった地点を目指して言語を組み立ててゆくのだろう。私の常々抱いているイメージは、絶対に届かないこの目標

⁴『ソシュール 第三回一般言語学講義—コンスタンタンのノートから』影浦峽・田中久美子訳、東京大学出版会(出版予定)。なお、そもそも他と異なるものとして経験される言語のまとまりではなく対象化され改めて内面化されるものとしての「単一言語」という概念が発生したのはロマン派以降であらうし、印刷出版による書き言葉の広がりとも関係している。

⁵小森陽一(2000)『日本語の近代』東京：岩波；森安達也(2002)『近代国家とキリスト教』東京：平凡社ライブラリー；柳文章(1982)『翻訳語成立事情』東京：岩波新書。

⁶管啓次郎(2006)「オムニフォン彫刻」『翻訳家の仕事』、p. 179.

⁷野谷文昭(2006)「語りと声」『翻訳家の仕事』p. 127.

に向かって、フランス語や日本語で作品を積み上げていく作者と翻訳者のそれぞれの営みである」⁸。

文学の翻訳が、このイメージに最もよく合致する。

2.3 翻訳はテキストを歴史に位置づける

「翻訳とは、ある外国語の土壌の上で一回限り起こった言語的事件を、日本語の舞台の上でもう一度起こさせるという、何か途方もない仕事なのである」⁹。幻想とはいえ一般に「他ではあり得ないまさにこの単独のもの」と見られる文学作品でなくとも、翻訳の対象は「何らかの言語表現」ではなく、歴史的な出来事により作られた固有の言語表現であり、宙に浮いたものではなく、社会や歴史、やはりその言語で作られた諸テキストの具体的な土壌の上に位置する¹⁰。

例えばアレサンドロ・G・ジェレヴィーニは次のように言う。「現代イタリアでは日本食を初めとする日本文化が流行している、というニュースをよく耳にする。確かにサブカルチャーの極端な現象やエキゾチックな色彩に彩られた伝統はそうかもしれないが、そのあいだにある『普通の日常』はまだまだよく知られていない。/そんな状況のなかで日本の現代文学の翻訳本を出すというのは、空に幻の島を浮かべるようなことで、読者が偶然にもその岸辺まで辿りついたとしても、島を支えている基盤が全然整っていないので、上陸できないケースが多い」¹¹。

また多和田葉子は、自分の詩に出てくる日本語の「畳」がドイツ語で「絨毯」と訳されたことを批判をしたある日本人に対し、「もちろん彼[訳者]は畳がどういふものかわたしよりよく分かっていました。でも、この詩の場面では日常くさい雰囲気が出ていないと困るので、『絨毯』にしたのです。『タタミ』を外来語として使うことはできますが、これではドイツではむしろオールタナティブなインテリアを持つ若い世代を連想させてしまい、両親と同居していた子供時代の日常という感じが出ません」と述べ、「絨毯」訳を擁護している¹²。

この点で翻訳は、元テキストが置かれている背景文脈における位置に対応する位置を、対応する対象言語の背景文脈の中で創り出す作業である。この文脈には、アレサンドロが言うようにテキストの外にある社会や生活、歴史から、テキストの集積までがある。

2.4 翻訳は言語の計算である

その上で、言語の計算レベルが現れる。主として関与するのは、原言語と対象言語の力(「原文への理解力は三分の一、文筆力が三分の二という割合」¹³になる)

⁸鈴木道彦(2006)「愚かさには国境はない」『翻訳家の仕事』, p. 212-213.

⁹沼野充義(2006)「不自由の果てへの旅」『翻訳家の仕事』, p. 34.
¹⁰ただしそれを「文化」といった曖昧なものとして絶対化するのには誤りである。

¹¹「エウリピデスからばななまで」『翻訳家の仕事』, p. 56.

¹²多和田葉子(2006)「ある翻訳家への手紙」『翻訳家の仕事』, p. 169.

¹³アルフレッド・バーンバウム(2006)「日本の小説を活性化する」『翻訳家の仕事』, p. 205.

と、両者をつなぐ力である。いずれにせよ、言語(言語学が理解するような狭義の「言語」)間の計算・対応付けは翻訳の前提条件であり、十分条件でも翻訳を翻訳として規定する弁別属性でもない。

3 翻訳プロセスの要素

前節で論じた四点のうち、「言語の音色が少し変わる」ことと「原テキストの理想をともに目指す」ことは、翻訳者の個人的投企を別とすれば社会的な結果から見た後知恵に任されるものであって、翻訳プロセスそのもののレベルでは可視化できない。それに対して、テキストの位置決めは、およそ翻訳がX文Y訳でも単なる原文の説明でもない限りいかなる翻訳にも共通する具体的な側面を構成する。また、とりわけ翻訳の専門家ではなくボランティアを含む翻訳者も考慮するならば、言語力もやはり一つの関与因となる(ただし、言語間を結びつける力は類型化しにくい)。

既往の翻訳論においては、言語力などを当然の前提として、「言語の音色が少し変わること」および「原テキストの理想をともに目指すこと」のレベルで議論が進められるか¹⁴、言語レベルに還元された技術を論ずるか¹⁵のいずれが多い。これらの議論では、テキストを歴史的な文脈に位置づける側面の整理や言語力の類型化が扱われていないことが多い¹⁶。

以下では、様々に異なる実際の翻訳者についてのイメージを先取りしつつ、前節の2.3と2.4に対応して、テキストの文脈を構成する要素のパターンと文脈への位置づけメカニズム、および翻訳者が持つ言語力の観点から、翻訳プロセスを考えるにあたって必要な基本要素を図式的に整理する。なお、これらの要因には、言語力のようにいちおう翻訳者に帰属するものと、文学作品か否かといったテキストのタイプに帰属するものがある¹⁷。

3.1 文脈へのテキストの位置づけ

X文Y訳等々にも「言語力」が要請されることを考えるならば、結局、「翻訳」を「翻訳」として特徴付ける技術的な核となるのは、原テキストがその言語での歴史的な文脈において有していた位置づけに対応する位置を翻訳テキストに翻訳言語での文脈の中で与える行為である。

この側面は、テキストがその中に位置づけられる文脈を構成するものは何か、及び、テキスト上のどのよ

¹⁴ヴァルター・ベンヤミン(1996)「翻訳者の使命」『ベンヤミン・コレクション2』東京:ちくま文庫。オリジナルの発表は1923年;村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』東京:文春新書。など。

¹⁵安西徹雄(1995)『英文翻訳術』東京:ちくま学芸文庫。など。

¹⁶これらの点は、『通訳・翻訳ジャーナル』のような実務的な業界誌がカバーしている。

¹⁷ただし、本来翻訳者において語られる「言語力」は「日本語」とか「フランス語」「テトゥン語」といった単一言語において定義されるものではなく、言語の細やかな位相との関連で定義されるべきものであり、一般に言語学が扱う「言語」のレベルでの力とはずれる。「いちおう」と述べたのはそのためである。ただし、本発表では「言語力」「言語」といった場合、言語学における用法に準じて狭義に用いることが多い。

うなメカニズムを通して与えられたテキストが文脈に結びつけられるのか、の二点を区別することができる。

3.1.1 文脈を構成するもの

文脈を構成するものは、大きく、テキストのアーカイヴ(テキスト文脈)と、テキストの外にある現実の文脈(現実文脈)の二つに分かれる。

前者は、たとえば、ヴィットリーニの翻訳において、他のいわゆるイタリア・ネオレアリスマ文学が日本でのくらしいどのようなかたちで紹介されているか、といった言語=テキスト(=メディア)として存在する文脈である。

後者の典型は、たとえば高見浩が紹介している。彼は、直訳すると「(観光客たちは)彼らの人生の貴重な一分間、教会の偉大なフレスコ画を照らすのに必要な代金を支払うべく、暗闇の中で二百リラ硬貨をとりだそうとする」となる“...(tourists) fumbling for two hundred lire piece in the gloom so they can pay to light, for a precious minute in their lives, the great frescoes in the chapels”という英文に「その場の情景」が「ピンとくる」訳を当てるにあたって、そこで言及されている教会に行くことが最も有効だったと語っている(この例は、「言語的意味」がわかっても、翻訳文に意味を付けることができるわけではないこと、翻訳上の意味づけは文脈に位置づけることで始めて可能となることを明確に示している)¹⁸。2.1で言及した、多和田葉子の例も、現実の文脈に関係している。

ちなみに、この観点からは、現在の機械翻訳は、テキストの文脈も社会的文脈も捨象されていることが、理論的のみならず技術的にも大きな欠点となっていると考えられる¹⁹。

3.1.2 テキストを位置づけるメカニズム

電子的な公開も含めて、「出版」される場合を想定するとわかりやすいが、テキストの位置づけが行われるのは言語表現レベルだけではない。例えばある翻訳テキストを上製にするか並製にするか、紙の色をどうするか、表紙デザインをどうするか、フォントをどうするかといった物理的な選択、文庫で出すか新書で出すかシリーズの一冊とするかといった選択もまた、テキストの産物を歴史的な文脈に位置づける行為であり、メディア論的に言うならば、そうした外的なテキストの位置は言語的レジスタに持ち込まれ、言語表現にも影響を与える²⁰。

¹⁸ 結局、高見はこの文を「仄暗闇の中で、彼らは一様に二百リラをとりだそうと財布をまさぐる。それを有料照明装置のスロットに入れば、彼らの貴重な一分間に限って内陣の各礼拝堂がライト・アップされ、名高いフレスコ画を鑑賞できるからだ」と訳出した(高見浩(2006)「あの年の夏」『翻訳家の仕事』p. 122-123)。

¹⁹ 用例ベース翻訳の技術は、テキスト的文脈を考慮したシステムに適用できる。しかしながら、現在のところ、後に述べるような対象のタイプと文脈の性格を考慮して技術をチューンする視点は見あたらない。これまでの用例ベース翻訳の相対的成功はむしろ、技術と文脈とテキストタイプの偶然的に良好な組み合わせに依存しているように思われる。

²⁰ ただし、メディア的レベルを独立に見るとそれは翻訳者よりもむしろ編集者の判断領域であり、翻訳者に関するメディア的要因は言

訳テキストを妥当な文脈中に位置づけるために翻訳者が用いる基本的メカニズムは、訳注と引用、言語表現の選択である。訳注は、現実の文脈を補いつつテキストの位置を決めるメタ=テキスト的メカニズムで、引用と言語表現の選択がテキスト内のメカニズムである²¹。

3.2 翻訳者の「言語」力

翻訳者は一般に翻訳先言語が母語レベルである。母語レベルにおける言語力の優劣は狭義の「言語」の範囲ではないので考えないとすると²²、言語力レベルで検討すべきは原言語の力のみとなる。最大の区分として設けることができるのは「母語話者」レベルの基本言語力(読書経験も含めて)を有しているか否かということになる²³。

4 テキスト・タイプと翻訳要素

メディア論的にも言語論的にもテキスト・タイプを簡単に定義できるわけではないが、ここでは便宜上、テキスト・タイプを(a)文学テキスト、(b)科学・特許・公式文書類、(c)通俗科学・社会・経済・政治等について一般向けに書かれた中間的テキスト、の三種類に設定して議論する。前節で述べた翻訳プロセスの要素とテキスト・タイプの関係は、概略、次のように整理できよう。

文学テキスト 依存する文脈はテキスト文脈・現実文脈の双方に及び、広く、双方の重なりはしばしば小さい。位置づけの言語的メカニズムとしては、引用のような大きな具体的表現単位、文章のリズムやうねりのような抽象単位、語彙のような小さな具体的単位まで全般に及び。母語話者レベルの言語力よりもノに加え、表現の集積への知識といった力がより強く求められる。これらの性質から、文学テキストの翻訳は、多く「文学者」や「文学研究者」が担う。

科学・特許・公式文書等 依存する文脈はテキスト文脈・現実文脈の双方に及び、範囲は比較的明確に限定され、専門語等を介してテキスト文脈と現実文脈は翻訳作業において重ね合わせることがかなりできる。専門語彙や固定的連語表現等が発達しているため、それらがテキスト文脈への言語的位置づけメカニズムとして用いられる²⁴。現実文脈への位置づけが強く要請さ

語的レベルに一応還元して考慮できると考えられるため、ここでは扱わない。

²¹ 実際に経験できる文脈も、引用・選択できる関連言語表現のアーカイヴも不足している場合、たとえば、エーリオ・ヴィットリーニ『シチリアでの会話』(鷲平京子訳、東京：岩波文庫)のように、約三分の一が訳注と解説で構成されたりすることにもなる。

²² 飯田隆(2002)「言語の知識」野本和幸・山田友幸編『言語哲学を学ぶ人のために』京都：世界思想社、p. 35-56。

²³ それ以外にレジスタやテキスト・タイプの範囲、特定レジスタやタイプへの造詣などがあるが、これらはいわゆる「言語」力ではなく、関連アーカイヴに対象テキストを位置づける力に属する。

²⁴ テキスト文脈と現実文脈の重なりを介して言語的位置づけメカニズムにより現実文脈への位置づけもなされる。特許や公式文書の翻訳を専門の職業翻訳者が担うことが可能なのはこのためであると考えられる。ただし、この領域で専門化した翻訳者は、少なからぬ場合、対象世界についても高度な理解を身につけている。

表1 翻訳従事者の類型

	文学	科学・特許等	中間的なもの
母語相当	a. 専門翻訳者・文学（研究）者	b. 専門翻訳者	c. 専門翻訳者・言語に堪能な好事家
非母語相当	d. 文学（研究）者	e. 分野専門家	f. 翻訳者・翻訳志望者・分野関係者

れる場合、翻訳者ではなくその領域の専門家が翻訳に従事する。公式文書等を扱う職業翻訳者には原言語に対しても母語話者レベルの言語力を持つことが多いが、これはテキスト・タイプに条件付けられるよりも、経済的な側面に依存する。

中間的テキスト テキスト文脈は比較的広いレジスタに依存することが多く、さほど前景化しない。現実文脈は科学や特許文献ほどではないがある程度絞られると同時に重要な役割を果たす²⁵。文脈位置づけメカニズムとして意識されるのは主として語彙であり、文体は抽象的には重要であるが、翻訳プロセスで強く意識されることは少ない。やはり翻訳者ではなく主題専門家が翻訳に従事することがある。言語力はテキスト・タイプによりも外的な条件に依存する。

5 翻訳従事者の類型と翻訳支援

翻訳者は、扱うテキスト・タイプと言語力から、大きく6つに区分できる（表1）。通常、「翻訳者」とされるのは、「a」「b」「c、f」における「（専門）翻訳者」である。今のところ、これら翻訳者に対する支援の可能性は、以下のように考えることができよう。

文学を対象とする翻訳者の翻訳プロセスは、文学が一回切りの出来事である（と見なされている）こと、文脈位置づけの範囲と単位が大きくその定式化が困難なことから、プロセスを分析的にモジュール化し、翻訳支援システムとして「総合的レファレンス機能の提供」以上に効率化することは今のところ難しい。

科学・特許等を専門とする翻訳者の翻訳プロセスは、参照アーカイブの確定においても、言語表現レベルの操作の定式化においても、自動的な処理が貢献できる領域は相対的に大きい。また、事実的文脈と言語的文脈の重なりが大きいため、支援を「言語」レベルで定義できる領域が大きい。翻訳者としては、原言語において母語相当の力を有し、職業的訓練を積み領域に特化した専門翻訳者が主であるため、原言語レベルで（事実情報ではない）言語的意味をチェックするといった作業は少ない。したがって、TRADOS²⁶のような専門語彙や過去の翻訳ログの再利用といった支援、また、TransType²⁷が実現しているような翻訳文書入力力の補完による訳文入力手間の削減といった支援が、ユーザ仕様上も技術上も有効に定義される。

²⁵そのため訳注も頻用される。

²⁶<http://www.sdl.com/products-corporate/>

²⁷Macklovitch, E. (2006) "TransType2: the last word," *LREC'2006*, p. 167-172.

中間的なテキストを対象とする翻訳者の翻訳プロセスは、言語表現レベルの操作に加えて事実情報レベルでの操作が重要となる場合が少なくない。また、こうしたテキストを対象とする翻訳者は、職業翻訳者であっても専門特化していないことが少なくない。いわば、「素人翻訳者」に最も近い場合、原言語テキスト段階での言語・事実双方に対するレファレンス・チェックの比重が大きくなる。技術的にも、科学文献等のようにテキスト文脈アーカイブの確定が明確でないため、言語構造の確率計算に基づく補完といった機能は有効に組み込みにくい。したがって、言語情報・事実情報・百科情報等の参照作業を軽減するような支援がニーズとしても高く、最も有効に定義される。

6 おわりに

以上、翻訳という行為を言語操作・認知プロセスよりも広い範囲で捉え、その特徴を整理し、翻訳従事者とそれに対する可能な支援を類型化してきた。この類型化は概略的なものであり、実際に有効な翻訳支援システムを定義しようとする際には、さらなる個別化が求められる。しかしながら、「翻訳」「翻訳支援」としばしば一口に語られる行為がどのような変異を含んでいるか認識するための一歩としては、これらの整理は有効であると思う。

本稿で述べた類型化を前提に、我々は、中間的なテキストを対象とする翻訳者、その中でもとりわけオンラインで社会・経済・時事・文化・スポーツなどのテキストを対象に翻訳活動を行うボランティア翻訳者（および翻訳志願者）—したがって、必ずしも原言語の力が母語相当ではないような翻訳者—に特化した、翻訳支援システムの開発研究を進めている。

より具体的には、原言語を対象としたレファレンス機能の高度化として、高品質辞書の柔軟な自動検索を含む辞書参照と図書館の代替としてのウェブ情報資源に対する事実情報・百科情報の参照、ウェブ情報資源からの分野依存辞書の強化、ウェブ情報資源を活用した先行テキスト文脈から得られた言語パーツのリサイクル機能を備えた、オンライン翻訳環境の構築を進めている。

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤(A)「翻訳者を支援するオンライン多言語レファレンス・ツールの構築」(課題番号 17200018)の支援を受けている。